

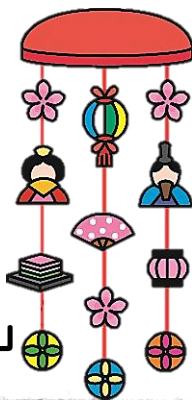
いづみっ子

道泉地域力推進協議会 TEL・FAX83-9084

子育て支援グループ発行 2022. 3. 10 号



大切にしたい。
「タテ・ヨコの関係と
ナナメの場」



「ママががんばるからぼくもがんばる!と息子と一緒に向かい合って宿題した日々は忘れられない宝物になりました。ずっときつとどこかでコンプレックスだった、そして夢だった高校卒業。それが現実になるのは、今まで支えてくださったみんなみんなのおかげです。この感謝の気持ちを胸に35歳の高校生、卒業します。」
スザンヌこと山本紗衣(やまもとさえ)さんのブログから。



「どうせん子育てひろば」のご案内

令和4年度の開催につきましては、3月初めの段階では使用許可を申請しているところです。

通年開催となってから12年目の来年度も5月から9回を計画しました。

開催日は次号でお知らせします。コロナ禍の下、予定は変更となる事があります。

ご期待に添えないことも予めご了承ください。



新型コロナウイルス感染症について、市内の新規感染者は2月初旬以降、穏やかな減少傾向にあるものの、10歳未満の新規感染が目立ち、3月3日は73人中、30人と4割を超えています。

3月4日付けの瀬戸市安全安心情報メールはこう伝えています。いっぽう市立学校では「教育活動を継続しつつ、校内での感染拡大を抑制するため、臨時休業を行います。」とのこと。



つるし雛が始まったのは、江戸時代といわれています。その頃、特別裕福ではない一般のお家では、雛人形はとても高価なもので、なかなか手に入らないものでした。

だけど、生まれてきた子供の幸せを願う気持ちはみんな一緒。だから、お母さんやおばあちゃん、叔母さんから近所の人たちまで、みんなで少しずつ小さな人形をつくり、持ち寄ってつるし雛が作られ始めたんです。



「今日からあなたもつるし雛博士!」、つるし雛大百科から引用しました。

「いろはにほへとちりぬるを たくさん並んでくるくる回る」。その一つ一つの細工物は、平仮名47文字すべてをそれぞれ一度ずつ使って作られたいろは歌に基づいたものとか。

コロナ禍の下の現在なら、さる(去る)にかけて、「病が去る」・「災いが去る」という意味が込められた猿がいちばん受け入れられやすいでしょうか。

新暦でお祝いする桃の節句は過ぎてしまいましたが、片付けるのが遅くなったとしても特に問題が生じるわけではないということで、道泉地域交流センターではしばらくの間、飾り続けるそうです。



タテの関係にある親や先生、ヨコの関係にある友だちには話にくいこと、近所のお姉さんのような“ナナメの関係”の人になら、そっと打ち明けられるかも。

そんな温かいつながりが生まれる「ナナメの場」を広げるキャンペーン、始めます。



NHK帯広局では十勝地方でこのような取り組みをしています。

「ひとりの子どもを育てるには、ひとつの村が必要だ」、アフリカに伝わるこのことわざを大切にしているNPO 法人「ぷれいおん・とかち」を取り上げたラジオ番組を聴きました。50年続く歴史の中には、子育てのヒントや忙しい頭を緩めてくれる温かさが、たくさん詰まっているそうです。0歳から幼児、学生、社会人、親世代、そして地域のおじいちゃんおばあちゃんたちも関わっている縦・横・ナナメのネットワーク。

あの頃じぶんが助けられたから、次はだれかを助けてあげる番に。やさしさのバトンリレーが受け継がれているようです。

新型コロナウイルスと向き合う



合格祈願

コロナ禍で求められてきた「新たな生活様式」は、さらに長期化の様相を呈しています。感染症の拡大を最小限に食い止めるために、他者と身体的距離をとる、密をさける、マスクを着用するなどの実践は大切です。しかし、ヒトは、他者との「密・接触」を基本とする社会的環境に適応しながら、長い時間をかけて進化してきた生物です。他者と身体的距離をとりながら生きる日常は、人類が経験したことのない未曾有の事態です。環境の影響を大きく受けながら脳と心を発達させる「子どもたちにとって真に必要な」新たな生活様式の提案を図っていく必要があります。その羅針盤となるのは、生物としてのヒトの脳と心の発達の科学的理解にほかなりません。

「コロナ禍でのヒトの育ち」というタイトルの11分半弱の講演をYouTubeで視聴しました。

主催者の国立情報学研究所、大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム『教育機関DXシンポ』事務局がその概要をまとめていて、上記はそれを転載したものです。



講演者は明和政子(みょうわまさこ)京都大学大学院教育学研究科教授です。専門は「比較認知発達科学」、ヒトの発達を他の霊長類と比べて研究されています。

トイレトレーニングは大変な作業です。始めるのは子どもが自分自身に自信をもち、周囲と信頼関係を築いていく重要な時期に当たります。このタイミングで失敗する経験、嫌な思いを経験させていくのがはたして良いものかという疑問を抱きました。発達科学の知見に基づいて模索して、トイレトレーニングアプリ「トイトレ ムーニーちゃんとトイレトレーニング」を研究開発された方とご紹介すれば、ご存知の方がいらっしゃるかもしれません。



脳が発達する過程で学習効率が高い時機があり、「感受性期」と呼ばれています。大脳皮質にある「視覚野(しかくや)」や「聴覚野(ちょうかくや)」の発達の感受性期は、生後数カ月から就学期前くらいまでと言われています。

その次の段階で、他者の動く表情を目にする日常経験が、今度は乳児の脳と心の発達にとっても重要な役割りをするということが知られています。

乳児は、目や口がダイナミックに動く表情を目にしながらか、喜びや怒りなど相手の感情を理解する能力を発達させていきます。

また、「いい子だね」などと相手が口から発する音声とそれにともなう口の動きの視覚情報を統合しながら、言語を獲得していきます。相手の表情を理解し、その表情や音声をまねすることで、相手の心を想像する心、共感する心などを発達させていく時期です。

「新しい生活様式」の下で、マスク着用が当然となっている現状ではこうした機会が失われていると、明和教授は指摘します。

4、5歳くらいから感受性期を迎えると言われる前頭前野(ぜんとうぜんや)。考える、記憶する、アイデアを出す、感情をコントロールする、判断する、応用するなど、人間にとって重要な働きを担っているため、人間が人間らしくあるためにもっとも必要な存在といえるそうです。

前頭前野が衰えるということは、もの忘れが増えたり、考えることができなくなったり、キレたり、感情的になったり、やる気の低下などにつながります。

ということであれば、新型コロナウイルス感染拡大防止のために必要不可欠なマスク着用も、子どもの脳の発達を考えると、今回のコロナ禍以前の変えてはいけないものとの折り合いを計ることが求められてくると考えられます。

「こういう状況になったら現行の『新しい生活様式』を見直すという見通しを示さないまま、いつまでも黙食やマスク着用を子どもたちに課していくのは問題です」と明和教授は提言しています。

最後に、このような研究報告もあるそうです。

ミブラウン大学が昨年8月に出した報告によると、コロナ禍以前に生まれた生後3カ月から3歳の子どもの認知発達の平均値を100とした場合、コロナ禍で生まれた同年代の子どもたちは78まで低下しているようだ。